

東日本大震災関連情報

千葉労災病院 救急・集中治療部

森脇龍太郎

はじめに

2011.3.11以来、日本国民は心をひとつにして、この未曾有の大災禍に立ち向かっているように感じられます。破産寸前と警鐘を鳴らされながらも、快適な生活を続けていくために借金をし続けてまでもこのまま突っ走ろうとしていた日本国民にとって、今回の試練が立ち直りのきっかけを与えてくれたターニングポイントであったと、後世語り継がれるようにしたいものです。それまでの快適な生活に別れを告げ、伝統的な日本人らしい耐乏生活に耐え、かつ借金を完済してはじめて、日本は復興を果たしたといえるのではないのでしょうか。転んでもただでは起きないようにしたいものです。

人間の脳細胞には「仲間になりたい」という本能があるといえます。自分の行為によって人から感謝されるということは、本能的にたいへんうれしいものです。被災者の仲間になって、感謝されたいと誰もが思っていることでしょう。そんな中で、高校生の息子がボランティアとして被災地に行きたいとふと漏らしたことは、父親としてたいへん嬉しく誇りに思ったものです。今回労災病院グループの代表として東北地方の被災者の救護活動に従事でき、微力ながらも打ちひしがれた方々の力になれたことは、今回参加したチーム一人ひとりにとって最高の幸せであったと感じています。

それでは、千葉労災病院の今回の東北地方の被災者救護活動についてご報告いたします。

①派遣チーム：5名

医師 森脇 龍太郎（救急・集中治療部）

長谷川 将之（研修医）

看護師 前原 みはる

薬剤師 黒須 智博

事務員 古和田 昌行

②日程

3月31日～4月3日（実際の活動は4月1日～2日の2日間）。

3月31日の往路は、東北新幹線で那須塩原まで行き、車で拠点地である東北労災病院に到着。4月3日の復路は、仙台からバスで山形空港まで移動し、羽田までの空路を利用した。

③被災地での活動内容

マスメディアを通して大まかな被災地情報は得られており、避難場所においてプライマリーケアを主体とする医療活動を行うことが今回の任務であり、そのために必要な医療資源を持参する必要があるという事前情報は得られていた。しかし、現地に何があって何がないのかについての情報に乏しく、メンバーすべてがさまざまな医療資源をリュックに詰め込んで、お揃いのジャンパーを着込んで、同僚のお見送りを受けながら勇んで病院を出発した。食料についても、朝夕は

東北労災病院の食事が用意されているが、昼食は用意されていないということであり、道中コンビニなどに立ち寄るたびに食料を買い込んだメンバー（看護師の前原など）もいた。私などは、荷物が重くなるのを避けるため、何かあるだろうし、なければならぬと高をくくっていた。いざ避難場所に行ってみると、避難場所にはカップ麺、缶詰、アルファ米などが豊富に用意されており、われわれ救援者の余剰分も豊富にあり、おいしくいただいた。また避難場所にある薬剤についても情報が少なく、必要最小限と思われる薬剤を事前にリストアップし、薬剤師の黒須が持参したが、これも現地に行ってみると横浜、中国、山陰労災病院のなどの先発隊が多く、薬剤を残してくれており、投与薬剤に困ることはなかった。

3月31日、新幹線で那須塩原（この時点では終点）まで行き、労働者健康福祉機構の本部派遣の2名の方々にハイエースを運転してもらって東北自動車道を一路仙台へと赴いた。この時点では高速道路を一般車両も通行できるようになっていたものの、ガソリンは仙台市内ではまだ不足しており、最後のサービスエリアで20分程度待って補給した。その待ち時間に、労働者健康福祉機構理事長から激励のお電話をいただき、恐縮した次第である。東北労災病院到着後は職員の方々の温かいお迎えを受け、夕食を用意していただいた。実際の活動は翌日からであるということであったが、事前に避難所の様子を把握しておきたいと考え、夕食後避難場所へ赴いて前任の山陰労災病院のチームから申し送りも受けた。高齢者を中心とした約100名の人々が仙台市若林区にある七郷中学武道館に避難されており、2名の方がインフルエンザに罹患され、視聴覚室に隔離されていた。幸い解熱されて元気そうであり、4月3日には隔離解除の予定であった。武道館も視聴覚室も石油ストーブが焚かれており、また飲料水や食料も量的には充足していたが、食料はカップ麺やアルファ米などの炭水化物が中心であり、たんぱく質やビタミン不足の感は否めない印象であった。当日は山陰労災チームが避難所に逗留されるということであり、私どもは東北労災病院に引き返して、睡眠をとらせていただいた。

4月1日は、8時に起床して東北労災病院の朝食をいただき、同じくハイエースで若林区役所保健福祉課に赴き、情報交換をするとともに当日の活動分担を確認した（写真1）。大幅に減少したとはいえ、合計1900名あまりの方々がいまだに避難所で寝起きされているようで、NTT東日本東北病院などの4つの医療チームが拠点を設けて活動しており、われわれのチームの拠点が七郷中学ということなのである。若林区役所保健福祉課には、全国から集まった医薬品を中心とする医療資源が豊富に備蓄されており、各避難所で必要とするものはその場で供給された。その後七郷中学に移動して、救援活動を行った（写真2-4）。避難所である武道館では、人影が昨夜と比較するとまばらであったが、日中は自宅に戻って片付けなどを行う人が多いためであるとのことであった。挨拶がてらすべての方々に声を掛けさせていただいた。避難されている方々は当然のことながら疲労の色は隠せないものの、幸いそれほど調子の悪い方はおられず、また視聴覚室に隔離されているインフルエンザ罹患患者2名もお元気であった。若林区役所でも七郷中学でも、全国から派遣された行政保健師が基本的な情報をすべて把握しておられ、頼りになる存在であった。避難所である七郷中学は、自動車専用道路の仙台東部道路から数百メートルの内陸側にあり、この道路が堤防代わりになって、それより内陸側には津波が達しなかったようである。実際、仙台東部道路下のトンネルをくぐった先の海側はまさに壊滅状態であり、トンネルを抜けるとそこは瓦礫の山であった（写真5）。避難されている方々の多くは、それまで暮らしていたわが家が流されてしまったのであり、また家族や友人を亡くした方々も多いということであり、その気持ちは察して余りある。浜辺に向かう途中、他の建物がほとんど流されている中で、鉄筋4階建て

の荒浜小学校の校舎と体育館がポツンと残っており、印象的であった（写真6）。3.11には小学生や近隣の住民300人あまりの人々が翌日ヘリコプター救助が到着するまで一夜を明かした場所であるという。地震が来たのはまさに下校時で、荒浜地区の避難場所にもなっていた小学校には住民らが次々に集まり、帰ろうとしていた子供たちも大半が残って一命を取り留めたという。夕方からは医療チームの常駐していない八軒中学に移動し、2時間程度滞在して医療活動を行ったが、やはり感冒症状を訴える方々が数名いらっしまった。その後七郷中学に戻って、夕食は避難所で炊き出した食事の残りをいただき、22時に東北労災病院に引き上げて待機した。

4月2日も、若林区役所から七郷中学を拠点として、昨日の八軒中学に加えて、沖野中学避難所にも巡回した。診療所や病院での治療も行われるようになりつつあったが、幸い何れの避難所においても、それが必要と思われる方はおられず、感冒症状を訴える方が少数認められるのみであった。インフルエンザ罹患者もこの日も発熱は認められなかった。この日はこころのケアチームの活動も行われていたが、避難生活が長期になるにつれ、その需要は高まっていくものと思われる。またサックスフォンの生演奏が演歌を奏で、避難所の方々から盛大な拍手を受けていた（写真7）。翌日から活動する横浜労災病院の医療チームが午後には到着し、申し送りを行った。写真8は、その際に横浜労災病院の方々と一緒に記念撮影したものである。両日とも肌寒いものの、好天に恵まれ、活動に支障をきたすことはなかったことは幸いであった。前日と同様に22時に東北労災病院に引き上げて待機した。結局、両日とも避難所からの連絡はなかった。

4月3日は、再度横浜労災病院の医療チームに申し送りを行った後、仙台から山形空港へバスで移動し、羽田空港を経て千葉労災病院に帰院した。

おわりに

今回のわれわれのチームの結束力は固く、機構本部の方々や千葉労災病院と密接な連絡を取りながらわれわれの行動のすべてを設定した事務員の古和田を中心に、各自がそれぞれの職種の特性を生かした役割を十分果たせたと自負しています。メンバーすべてが口をそろえてまた同じチームで被災地に赴こうと誓って、羽田で解散しました。今回われわれに病院を代表して被災地に赴くというたいへん重要な任務を与えてくださった病院長、看護部長、薬剤部長、事務局長にたいへん感謝しています。



写真1：若林区役所保健福祉課にて、全国各地から支援に来られている保健師たち。



写真2：七郷中学保健室。被災者のカルテを整理する前原看護師と黒須薬剤師。



写真3：七郷中学保健室。カルテをチェックする古和田事務員と森脇医師。



写真4：七郷中学武道館。聴診器を用いて診察する森脇医師。



写真5：瓦礫の山となった荒浜地区。



写真6：車内から見た荒浜小学校の体育館（手前）と4階建て校舎（奥）.



写真7：七郷中学武道館に慰問に訪れたボランティアの方々。



写真8：避難所である七郷中学校教室前で，横浜労災病院の方々と一緒に，千葉労災病院のチームは白いジャンパーを着ている。左から古和田事務員，黒須薬剤師，前原看護師，森脇医師，長谷川医師（研修医）。